指定討論３
教室における表現形式の指導の実態

社会科・国語科における表現力の指導

棚橋　教室における表現形式指導の実態ということがこれまでのお話でも問題になっておりました。そこで、私は、言語の教育を学校教育の中でどう位置付けるか、またそういう時には全体構造の見通しが必要なのだ、ということを多少なりとも明らかにしようと思いまして、今現場でどういうふうな実態で社会の授業、国語の授業がなされているのか、ということをかい摘んでご説明したいと思います。

社会科の授業ですが、現在社会科の授業は討論型とか主張型の授業が多くなっているような気がします。つまり、説得の論法を身につけていないと成り立ちにくいような授業形態が増えているというわけです。今日の高木さんのご提案の中に「表現形式の指導というものが社会科の中ではなされていないのではないか」ということがございました。それで、実際にその討論型の授業というものの実態を資料①に載せてみました。見ていただくとお分かりになると思いますが、やはり、表現形式の指導はなされていないわけです。

一方、国語はどうかということを考えますと、国語においても実はあまり効率的に表現の指導がなされていないような気がします。教師の存在ということが先ほどの野村さんのお話の中にありましたけれども、今、実践現場ではそれぞれの心ある教師が、例えば日記指導やスピーチ指導など、日々の地道な指導を通して表現形式の技能を育成しているのではないかと思います。そうした場合に、表現形式の指導ということに焦点を当てて、国語科が社会科にどういうふうにサポートするかというのも大事だと思いますけれども、学習における基礎的事項を統合してしまったらどうかと思うのです。つまり、話し合いの仕方ですとか、表現形式がどうあるべきかですとか、それからそれとは別の角度ですが、分類の仕方ですとか、観察の仕方ですとか、実験の仕方というようなもの、こういった学習を成り立たせるための基礎となるものをまとめて「方法科」という教科を作っていくというようなことを考えてもいいのではないかと思います。ちまたでも“統合”ということがよく言われているように思いますが。ただ、今日お話を伺っておりまして、やはり突飛な方法ではなくて、他教科の中で国語・言語の指導というものをもっと考えていくべきである、ということを私としては思いました。いたずらに、統合することによって、国語における言語能力の育成という視点が薄れては困るからです。やはり、国語科としての指導があって初めて身につく言語能力が、土台にあるべきだと思います。以上です。

高木　それでは今まで皆様からいろいろご意見等をいただきましたけれど、最後に寺井さんよりまとめのお話をお願いいたします。

資料①　研究授業「雪国のくらし」（４年生）

Ｔ　消雪パイプがなかった時は、雪を取り除くのに大変苦労をしていた。だから、消雪パ イプがどんどん広まっていった。ところが地下水を汲み上げすぎたために、地盤沈下が起きてしまったということでしたね。この地盤沈下はほうっておいたらまずいよね。みんなはどんな解決策を考えましたか？
Ｃ　一度使った水を何度も使う。
Ｃ　ある程度大きな道路は残して、あとはなくす。
Ｃ　消雪パイプをなくして、地盤沈下を防ぐ。
Ｃ　地盤沈下をなくすために、消雪パイプをなくして機械除雪にすればいいと思います。（中略）
Ｔ　そうすると、残すのにも「今のまま残す」と、「減らして残す」の２通りがあることになるね。なぜ残そうとするのか、そのわけを聞いてみよう。
Ｃ　ぼくは減らすなんだけど、今のままでは地盤沈下がおこるから。
（後略）